スタンダール症候群

札幌市医師会
札幌清田病院
山内　尚文（やまうち　なおふみ）

人名のついた症候群は少なからずあるが、この症候群は、「赤と黒」や「パルムの僧院」で、フランス文学史上名高い小説家スタンダールの名がついている。スタンダールが、1817年に、初めてイタリア旅行をした際に、フィレンツェのサンタ・クローチェ教会で、フレスコ画を見上げていた時のエピソードに由来する。彼は、こう記している。「僕は祈禱台の足乗せに坐り、顔をそらせて、聖書台に寄りかかって、天井を眺めることができたが、ヴォルテラーノの巫女たちはおそらく僕に、絵画がこれまでに生じさせたもっとも激しい喜びを与えてくれた。僕は自分がフィレンツェにいるという考え、墓を見たばかりの偉人たちの近くにいるという考えに、すでに一種の恍惚状態であった。崇高な美を熟視することに没頭して、僕はそれを間近に見て、いわばそれに触れていた。僕は美術から受けたこの世ならぬ印象と興奮した気持が混じり合ったあの感動の頂点に達していた。サンタ・クローチェを出ながら、僕は心臓の動悸、ベルリンでは神経の昂りと呼ばれるものを覚えていた。僕の生命は擦り減り、倒れるのではないかと心配しながら歩いた。」[1]。この教会には、マキャヴェッリ、ミケランジェロ、ガリレオらが埋葬されている。172年後の1989年、フィレンツェの精神科医グラツィエラ・マゲリーニが、同様の症状を呈し、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ病院を受診した外国人患者106例をまとめ、スタンダール症候群と名付けて報告した[2]。その機序として、偉大な美術品に接し、あまりにも圧倒された時に、自分自身を制御しきれないほどの情動により、眩暈、動悸、幻覚、方向感覚の喪失、離人症、胸痛、発汗、脱力、疲労感、不安などの症状が引き起こされるのではないかと説明されている[3]。

30年近く前であるが、私も同じような体験をしたことがある。奇しくも、初めてイタリアを訪れ、同じフィレンツェのウフィツィ美術館に行った時のことである。この美術館は、ルネサンス美術の宝庫として知られているが、「ボッティチェリの間」に入り、かの有名な「ヴィーナスの誕生」と「プリマヴェーラ（春）」を目の当たりにした時である。「あーっ、これか！」と、衝撃を受けるような感動を覚えた時に、突然、気の遠くなるような眩暈に襲われた。その後は、集中して鑑賞することができず、美術館を出るまで、ふわふわするような酩酊状態が続いた。後年、この症候群の存在を知り、考えてみれば、自宅にあった美術全集「世界の美術館」を、小学生の頃から折にふれて見ていて、特にお気に入りは、ルーヴル美術館とウフィツィ美術館だった。なので、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロ、そして、ボッティチェリなどのルネサンスの絵画をぜひ一度は見てみたいと思っていた。長い間の念願がかない、ルネサンス美術が花開いた、まさにその地で、本物を見ることができたという感動が、あの症状を引き起こしたのかと納得がいったのである。ところで、この症候群は、美容院脳卒中症候群との関連を指摘されることがある。洗髪時に仰臥位で頭部を後屈することで、椎骨動脈が圧迫され、脳血流が一時的に阻害されるために、同様の症状が起こると推測されている[4]。確かに、スタンダール本人も、「顔をそらせて」と書いているし、私の場合も伏線があり、２日前に、ヴァティカン美術館を訪れ、回廊の壮麗な天井装飾画や、システィーナ礼拝堂のミケランジェロの天井画を長時間見上げ続けていたのである。その影響が少なからずあったのかもしれない。しかしながら、これらの症候群を同一のものとするのは、なにやら味気ない気がする。頭部の後屈は、原因の一つかもしれないが、なによりも、人生で何度もあるとは思えない強烈な感動という最も重要な要素が抜け落ちてしまっているではないか。症状は似ているが、別々の症候群と考えたいと思っている。コロナ禍が明け、また、あの魂のふるえるような瞬間（眩暈は困るけれど）に出会える日が来ることを願っている。

〈参考〉

１）スタンダール著：臼田紘訳「イタリア旅日記２／ローマ、ナポリ、フィレンツェ（1826）」新評論1992.
２）Magherini, Graziella: La sindrome di Stendhal. Ponte alle Grazie, Firanze 1989.
３）Leonardo Palacios-Sánchez, et al: Stendhal syndrome: a clinical and historical overview. Arq Neuropsiquiatr 2018; 76: 120-123.
４）Weintraub MI: Beauty parlor stroke syndrome: report of five cases. JAMA 1993; 269: 2085-2086.